

11 月のおはなし

「彼はなぜ陸上競技をやめたか」

伊藤は土手を走っている。

土

手を走ることは、とりとめもない行為だ。

穴の開いた洗面器を誰も使わないように、土手の価値は水が入る空間とそれ以外の空間の境界を成すことにある。必然、土手は切れ目なく延々と続く。結局どこまでいっても土手は土手、それは永遠に近いような退屈だ。これが駅伝の予選会でなければ、この寒空の下でこんな不毛なことはしない、伊藤はそう思った。



伊藤が担当する区間は一〇キロ。五キロ走って、折り返し、五キロ戻る。必死に走って結局元にした場所に戻るなんて、まるで雪山の遭難者だ、伊藤は心の中で毒づく。

補助輪つきの自転車に乗った子供を追い抜いた。あの子を二キロ前でも見た気がする。ベータ・エンドルフィンが脳細胞を少しずつ破壊しているのだろうか。

でも気分は一向に高揚せず、



思考力はどんどん低下していく。土手と前の選手のゼッケンだけ見ていると、虚無感に襲われて、気持ちが折れそうになる。伊藤は左右の風景に救いを求めた。

左

手は蘆に覆われた中洲が延々と続き、やがて流れが合流して川幅が広がった。よどみに水鳥が泳いでいて、手前のテトラポットには釣り人が三人並んでいる。右手は固く干上がった稲田が広がる。遠く焼却場と病院が見えた。つまらな



すことこそ、相応しい。

大根？

あれはどう見ても大根だった。でも、ベビーカーを押す夫婦は自分たちの子どもに接するように、慈しみの眼を向け、何かを話しかけながら歩いていった。伊藤は戻って確かめたい衝動に駆られたが勿論そんなことはできない。走ることに集中しなければいけない。伊藤は自分に言い聞かせた。なんでもいい。そうだ。おそらく満月の夜、意

い景色だった。

そ

の時、正面から歩いてきたベビーカーを押す仲の良さそうな親子とすれ違った。ベビーカーの中には元気そうな大根。そう、土手という場所は、幸せな人間が無為な時間を過ご

地悪な村はずれの老婆が使う魔法で、その姿を大根に変えられたのだろう。いやそれとも、あれはまさしく大根で、両親にそれを彼だと思ひ込ませるような魔法がかけられているのかもしれない。すりかえられた赤子は今頃どこかの大根畑に植わっているのだ。

その時、防風林が切れて右手に大根畑が見えてきた。

ま

さか、と思ひながらもそちらを見ずにはいられない。ひよつとするとこの中で、

むくむくしていて血色がいい赤子の足があるかもしれない。伊藤は妄想する。あの夫婦の子の足だ。豆粒のようなかわいい指が時々ぴくぴく動くのだ。白昼夢は暴走し、赤子の足はいつの間にか、もっと大きな足になっ



ていた。どこか見覚えのあるその足に伊藤はぎよっとして我に返った。

「しなびた大根」

伊

藤は先頭から大幅に遅れて次の走者にたすきを渡した。迎えた仲間の西沢が冷たく声をかけた。

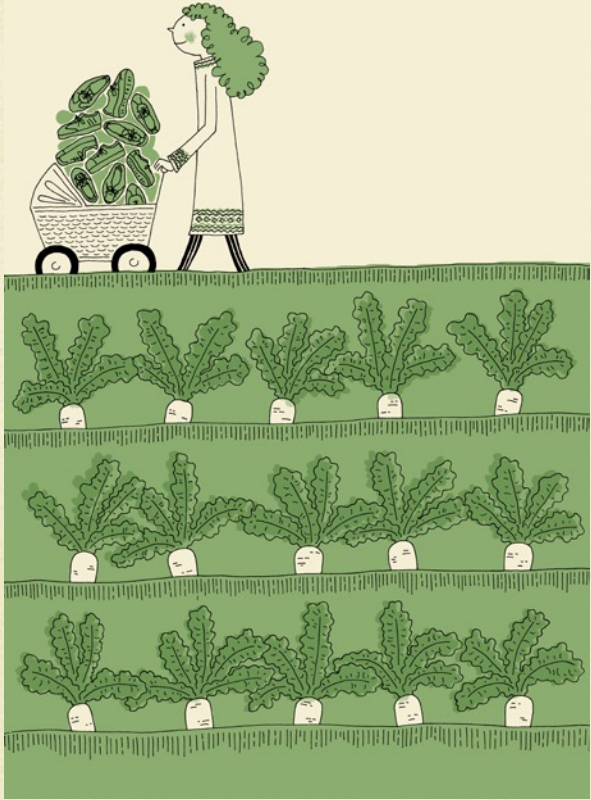
「具合でも悪かったのか？」

伊藤は地面に倒れ込んだまま、荒い息で尋ねた。

「なあ、俺、なんに見える？」

西沢は、体脂肪5%のやせ細った伊藤の体を上から下まで眺めて、ふん、と鼻を鳴らした。

5



妄想の地平線

11月のおはなし

文 ハヤシアキオ 絵 凹工房

本書の無断複写・複製・転載を禁
じます。

© HAYASI AKIO & BOKOKOUBOU